

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「日本語の魅力」

東京都

女子学院高等学校 1年

金丸 ゆり

私は小学生の頃、海外に住んでいたことがある。そこで英語に触れて以来ずっと思っているのだが、私は日本語が好きである。

まず魅力的なのは日本語が持つ響きである。英語には子音だけで構成する音があるばかりでなく、単語毎にアクセントがある。だから私には英語が高低・強弱の大きな差や鋭さがある言語のように聞こえる。一方、日本語は非常に穏やかで美しい響きを持つ。

言葉がよく吟味された上で使われている文章は美しい。詩や和歌、俳句等もそうだが、身近なところで思いあたるのは子供のための絵本である。私の場合、母が小さい子供達に本を読み聞かせることがあるため、家にあるたくさんのお絵本を身近だと感じるのだ。絵本は字数が少ない中でいかに表現し、子供の心をとらえるかが求められる。松谷みよ子の『いないいないばあ』や中川李枝子の『ぐりとぐら』等が、可愛らしい絵と共にリズムのある文章で子供の心をぐつととらえることは誰もが知るところである。

このようにあらゆる絵本が出版されているが、私自身が気に入っているのは瀬田貞二訳の『おだんごばん』である。ひらがなの多さ、話の流れのなめらかさ、そしてリズムの良さが特徴だ。しかし何にも増して魅力的なのは、「ぱくつと」「じいつと」「ころころ」といった擬態語の使い方が巧みで響きが心地良い点である。縁あって福音館書店の松居直さんから直接お話を伺うことができたのだが、

「こなれていないと感じた日本語を修正しながら読み進めるが、『おだんごばん』には朱筆を入れる必要がなかった」と絶賛していた。

第二に、日本語は表現が多彩である。文字をみると、ひらがな、カタカナ、漢字の三種類がある。ひらがな、カタカナ、漢字にはそれぞれのニュアンスがあり、私達は表現したいことに応じて使い分ける。

ひらがなは柔らかく優しい印象を与える。カタカナは外来語を表す以外にも異質な雰囲気醸し出している。例えば、谷川俊太郎の『二十億光年の孤独』という詩には「ネリリシキルルシハララしている」と書かれていることから、眠り、起き、働く火星人の様子が伝わる。漢字からは改まった、堅い印象を受けるが、意味が的確に伝わる便利な文字であ

る。例えば、「しじ」という言葉をみると、「指示」「支持」「私事」「師事」等が思い浮かぶ。同じ音でも漢字を用いることで意味が全く異なる。

文字だけではない。表現そのものも細やかで多彩である。雨にちなんだ言葉を電子辞書で調べたところ、大雨、五月雨、霧雨、朝雨、細雨、寒九の雨、…と、きりが無かった。桜の咲く頃だけに使う花雲り、花冷えも美しい。季節や天気の変化を敏感に察し、いとおしむ日本人ならではの言葉には風情がある。

魅力的だと感じる三つ目の点は、相手への気持ちがかもった言葉が多い点だ。例えば、「いただきます」という言葉。これは英語には無い言葉である。動物の大切な命をいだけくという意味だけではない。お米や野菜を育てた農家の人々や食品の加工に携わる全ての人への感謝がかもっている。「よろしくお願いします」という言葉も対応する英語が無い。アメリカに行った時、母は外国人への挨拶で戸惑ったと言う。敬語もまた、相手への敬意がいっぱいの言葉である。「さしつかえ無ければ」という言葉は相手をお願いをする時に用いるが、相手に断る余地を存分に与える思いやりを含む敬語である。「ご存知ですか」や「おいとまします」等、さらりと使いこなせるようにしたい敬語はほかにも山ほどある。日本語の言葉の数はとても多い。私自身知らない日本語がたくさんあり、すぐには覚えられない。しかし、実に多くのニュアンスを伝えることができる繊細さこそが良いのだ。英語は言葉が乏しい分、身振りや言語で補ったり、顔の表情をうかがっているのかもしれない。

しかし最近では、言葉の意味を誤解しているが故に、誤った使い方をする人が多かったり、感情表現に用いる語彙の数が少なかったりすることが多いようだ。その傾向が過熱することによって日本語の魅力が埋もれがちになることを、私は最も心配している。確かにいろいろな場面で「神」や「ヤバイ」が発せられているように感じる。その言葉に対しての説明をしない人が多いのもどうかと思うが、折り目正しい言葉を使う人がいるのもまた事実である。だから私は日本語の良さを大切に、言葉遣いに気を配り、様々な表現を使いこなせるようになりたい。